

「豊かなる日本のやきもの」展によせて

幕末京焼の名工・永楽保全のやきものについて

永楽保全(1795～1854)は、幕末に活躍した京焼の名工の一人として知られます。永楽家は、もとは西村を姓とし、代々善五郎を名乗る土風炉師の家系でしたが、十代善五郎(了全)の頃より製陶業に乗り出します。保全は了全の養子となり、文化十四年(1817)に西村善五郎を継ぎます。文政十年(1827)に吸江斎(表千家十代)や旦入(楽家十代)らとともに紀州徳川家の御庭焼(偕楽園焼)に出仕し、藩主徳川治宝より「永楽」の銀印と「河濱支流」の金印を拝領します。以降、保全は「永楽」を名乗ります。ちなみに、西村姓より永楽姓に正式に変わるの、明治時代に入ってからになります。保全の出自は明白ではありませんが、一説には、京都の織屋・沢井家に生まれ、幼少より百足屋という陶器の釉薬などを扱う薬舗に奉公し、大徳寺黄梅院の大綱和尚のもとで喝食として修行し、文化四年(1807)頃、大綱和尚らの仲介で了全の

養子となったと伝えられています。

大和文華館には、保全と関係する作品が二点あります。一点目は「紫地法花寿字入花瓶」(図1)です。これは、保全自身の作ではありませんが、保全と関わりの深い偕楽園焼の花入で、底に「偕楽園製」印が押されています。中国の法花に倣っており、白土の泥漿を細く絞り出し、文様の輪郭線を盛り上げて表しているのが特色です。寿の字や、如意頭文、蓮弁文などの輪郭が盛り上げて表され、地を鮮やかな紫釉とし、文様部分に白釉をかけています。

このような偕楽園焼の法花写しのやきものは、保全によってその技術が伝えられたと考えられます。先述したように、文政十年には吸江斎や旦入、保全らが偕楽園焼に招かれており、保全は交趾焼の写しを焼いて治宝の御意に叶い、二種の印章を賜ります。もともと保全の養父の了全は、了々斎(表千家九代)好みの紫の交趾釉(交趾焼に用いられる鉛釉)の作品に優れており、了々斎が了全の紫交趾釉のかかった菊の花形の向付などを紀州藩の茶会で用いたところ、治宝が気に入り、紫釉の鳳凰風炉や香炉を好み、了全の方でこれらを製作したということが『茶器名物図彙』(草間直方、文政十年[1827]序)に記されています。このような交趾釉の開発には、薬舗に奉公したと伝えられる保全の協力があったと考えられます。こうした評判もあり、治宝のもとに保全が招聘されたのでしょう。江戸時代後期には、知識人の間を中心に中国趣味

が流行しており、異国風の濃厚な趣の交趾焼が好まれ、京焼においても交趾釉を用いた作品が多く製作されるようになります。例えば、保全より一世代年上の京焼の名工・青木木米(1767～1833)は、型作りの急須や茗碗などに交趾釉をかけた作品を得意としました。その中で保全は、「交趾釉牡丹文水指」(図2)に代表されるように、文様の輪郭線を盛り上げる法花に倣った交趾釉のやきものに優れています。治宝は中国法花の蓮華文水指を所蔵しており、もともと交趾釉に優れていた保全が、治宝の好みを汲み取って法花写しを完成させ、保全と偕楽園焼、双方の得意分野となったと推察されます。偕楽園焼では治宝の好みを反映してか、中国法花の色調に近い、紫・青・白釉の組み合わせが主ですが、保全は、図2に挙げた「交趾釉牡丹文水指」が黄を基調として緑・紫を合わせた明るい色調となっているように、法花の色に拘らず、交趾釉の鮮やかな発色を引き出し、新たな趣のあるやきものとしています。

二点目は、保全の作である「染付結文形根付」(図3)。以降、本根付と記述)です。洗練された高級品を生み出す京焼の技術が求められ、江戸時代後期の京焼の陶工は各地に招聘されました。保全も紀州の偕楽園焼だけでなく各地に招かれており、嘉永四年(1851)には三井寺円満院門跡の支援を受けて大津で湖南焼を開窯します。本根付は保全が湖南で焼いたもので、底部に「於湖南／陶釣軒／保全造」と染付で書かれています。文を結んだ形状で、四つに分かれた区画の外側二つに紗綾形文が、内側二つに山間の橋を渡る

高士と童子が描かれています。蓋と身の上下二段に分かれ、蓋の内側には半円状の突起が、身には穴があり、突起と穴に紐を通すことで、蓋と身を繋ぎ(図4)、更にその紐の下に印籠を繋いで帯に挟めるようになっています。蓋と身に分かれる構造になっているのは、中国の染付形物香合に倣っているためです。結び文形で、高士風の人物を描く中国の染付形物香合は、小ぶりで結び目を描き入れないものが玉章香合、大ぶりで結び目を描くものが結文香合(図5)と呼ばれ、日本で愛好されていました。保全は、結文香合を写した香合(図6)も残しており、本根付が、形状や文様などを特に結文香合に倣っていることが分かります。本歌の中国の染付と比べると、すっきりと洗練された絵付けとなっています。結文は日本好みの文様であり、日本向けに多く輸出された中国の古染付にはしばしばこの形が取り入れられています。また、京焼の大成者として知られる野々村仁清(十七世紀後半に活躍)も、有職模様の表された結文形の香合を残しています。結んだ恋文などは着物の袂に入れたりしますので、着物と共に楽しむファッション小物である根付の形として趣向あるものと言えます。本根付は中国陶磁写しですが、香合ではなく根付に応用することで結文形を風流に活かしており、雅やかな京焼の和の要素も秘めているように感じられます。

(宮崎もも)

※図2・図6は『日本の陶磁13 京焼』(中央公論社、1989年)、図5は『形物香合図鑑』第4輯(京都美術青年会、1941年)より複写しました。



図1



図2



図3



図4

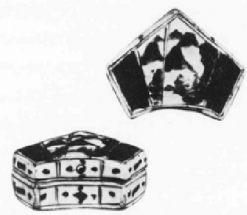


図5



図6

季刊 美のたより No.191

平成27年 7月3日

発行 大和文華館